

令和元年6月27日現在

機関番号：32707

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04630

研究課題名(和文) 越境する結婚移住者の教育観に関する基礎調査：国際結婚した在外日本人父親の言説分析

研究課題名(英文) Educational beliefs of marriage migrants: Analyzing discourses of Japanese husbands intermarried with Chinese, Filipina, Korean, and Thai wives

研究代表者

渡辺 幸倫 (WATANABE, Yukinori)

相模女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：60449113

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中国、韓国、タイ、フィリピン出身者と国際結婚し、現地で子育てをする日本人父親の教育観について調査を行った。具体的には、共同研究者3人でのべ15回対象国に渡航して日本人父親のライフストーリーを収集し、分析した。その結果、所得格差や費用対便益といった要因だけでは説明できない多様な移民現象をはじめ、アイデンティティ継承と同時に経済的資源獲得のための言語教育といった多重的意識と実践をとらえることができた。またインタビューした父親たちの「海外子育て中の父親の情報が少ない」という声に心え、得られた知見を漫画化して国内外に発信し、現実に海外で子育てしている父親たちに「考える材料」を提供した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、日本人の国際結婚相手の出身国のうちアジア上位4か国を横断的に対象とした。また既存の子育てする「親の教育観」に関わる研究がジェンダー化しており、国際結婚家庭の研究でも女性側が移動した場合を事例としたものが大半を占めていることを念頭に国際結婚をきっかけに国を越えて移動した父親の「語り」に着目した。その結果、所得格差や費用対便益といった要因だけでは説明できない多様な移民現象をとらえることができた。父親の育児経験の研究としても、国際結婚家庭の教育の研究としても、さらには在外ミドルクラス移民の研究としても従来の研究が見逃してきた視点を提供する事ができたと考える。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to identify contemporary issues involving educational beliefs of intermarried couples of Japanese fathers migrating to China, South Korea, Thailand and the Philippines after their marriage to spouses from relevant countries. The principal investigator and two co-investigators visited these countries 15 times and collected life stories of the Japanese parents' side of the couples. As a result, we captured complex and multifaceted migration phenomenon which could not be fully explained by conventional concepts such as income disparities and the cost-benefit of education. We further identified multiple conscious and practice of language education not only as a means for developing ethnic identity, but also as an investment for future capital. The important findings were published in Manga style to provide easier access for Japanese fathers who often struggle to rear their children overseas due to a lack of parenting information in multicultural settings.

研究分野：教育学、多文化教育、言語教育、社会教育

キーワード：国際結婚 多文化家庭 父親 結婚移民 教育観 ライフストーリー 研究還元への漫画利用 学校選択

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

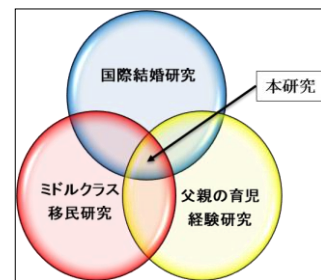
本研究は、先行して行った科学研究費基盤（C）2013-2015年度『多文化家庭の子育て戦略の課題 -日韓中の国際カップルへのインタビュー調査（研究課題番号：25381142）』から直接の着想を得た。この研究では、日本、韓国、中国に居住する国際結婚家庭の子育て戦略の特徴を明らかにすることを目的に、日本在住の日中・日韓カップル、韓国在住の韓日・韓中カップル、中国在住の日中・中韓カップルにインタビューし対象三国の課題を立体的に記述することを目指し、各国で非「標準」である国際結婚をしたカップルがそれぞれの文脈で大胆かつ細心な教育戦略を練り、実行している様相を描くことができた（渡辺2014, 渡辺・藤田ラウンド・宣2016, 渡辺ほか2016）。しかし、その過程で国際結婚を経て外国に住む日本人父親に関する研究の必要性が明らかになった。

日本における国際結婚をテーマにした研究は妻・母親側の視点に立ったものが際立つ。しかも、その多くが日本国内居住者を対象としており、日本人男性と外国人女性のカップルについての研究でも、「弱者」である女性を支援しようとする文脈で行われているものが多い。外国に居住する国際結婚した日本人の研究も妻側に立ったものが目立つ。女性の直面する問題の緊急性や深刻性と対比されているためか、日本人男性は経済的、権力的な優位性などの文脈で語られることが多く、研究の対象としてやや見えにくい状況に置かれてはいなかっただろうか。

一方、日本国内での子育て研究の分野では「父親」を対象とした研究の蓄積がなされており、父親の育児経験やそれを取り巻く言説の分析が進んでいる（石井2013、高橋2016など）。そこでは父親の育児参加を求める社会的状況の変化や、その変化に対する父親たちの対応の在り方などが議論されているが、文脈として国際結婚家庭が対象となることは極めて限定的であり、海外在住者に至ってはほぼ対象にすらされてこなかった。

また海外へ移動する日本人を対象とした研究では、「新興国から先進国へ」という経済移民と対比する形で、高熟練移民やライフスタイル移民を含む「ミドルクラス移民」をキーワードに進んでいる（松谷2014）。しかし、これまでの研究では移動動機に着目したもののや、移住先での生活を分析したものが多く個人の選択としての移住が主な対象であり、本研究が念頭におく「国際結婚から子育て」という時間的広がりを持った選択を家族で（あるいは家族の一員として）決定するという構造を伴う過程（プロセス）は対象となっていない。

つまり、海外在住の国際結婚家庭における父親の育児経験は、国際結婚家庭の研究としても、父親の育児経験の研究としても、ミドルクラス移民の研究としても、探求が求められている分野ということができる。



### 2. 研究の目的

本研究では、2013-2015年度に行った研究（渡辺ほか2016）同様ナラティブ理論に基づく枠組みの下で国際結婚を経て海外で子育てをする日本人父親の子育て・教育を軸にしたライフストーリーを収集し分析することで、国際結婚した日本人父親の子育て言説という大枠の下、海外で子育てをする父親たちの教育観について考察する事を目的とした。対象国は、2013-2015年度までの研究で扱った中国、韓国に、フィリピン、タイを加えた。これによって日本人男性の国際結婚相手国の上位4か国すべてが対象となる。また、これまでインタビューした父親たちからも「海外で子育てする父親に関する情報が少ない」という声が多く、国際結婚した日本人父親に関する教育言説の不在や情報不足を不安視する声が強かった。これらの声にこたえることも本研究の目的の一つとした。

### 3. 研究の方法

国際結婚を経て海外で子育てをする日本人親の子育て・教育を軸にしたライフストーリーを収集して分析した。申請時の計画では、4か国すべてを改めて調査する予定であったが、充足率の関係もあり2013-2015年度の研究で扱った中国、韓国については、既にインタビューした方々のフォローアップを中心とする事で、出張費用等の節減をすると共に、継時的な変化を念頭に調査を行った。一方、今回の研究（2016-2018年度）で新たに追加した調査地（タイ、フィリピン）では、新規の調査ネットワーク構築・拡張も必要であったため、集中的な調査を行うこととした。結果、タイ5回、フィリピン5回、韓国3回、中国（研究協力者の招聘1回を含む）2回、他にも日本国内で調査対象該当者の一時帰国時をとらえてのインタビューも行った。

#### 4. 研究成果

(1) 分析の結果、21世紀のグローバリゼーション下では所得格差や費用対便益といった要因では説明できない多様な移民現象が日本を含むアジアでも増加する兆しが随所で確認できた(渡辺ら 2016ab、渡辺ら 2019 など)。特に結婚移住は、その特性上、配偶者を起点として現地ローカル社会と深く関わることになるため、就労や留学など他の移住形態と比較しても移住先社会との関係の取り方が異なる。本研究では、次のような移民元の国や社会と移民先の「ローカル」が交差・混淆するトランスナショナルな空間としての多文化家庭のあり方についての論点が浮かび上がってきた。

また、本研究では結婚と移住や現地の子育てと教育について、その背景と経緯を含む実情の多様性が確認できたが、一方で今後の課題として、日本人移住者に対する日本語でのインタビュー調査だけの限界も明らかになり、配偶者側の意識や現地社会の文脈に即した考察をより深めるためにも現地協力者の必要性を実感した。

##### ① 東南アジア居住国際結婚家庭の子育ての状況：タイとフィリピンの事例

###### 英語優先の学校選択/移住した親の言語教育

まず、タイとフィリピンともに英語の地位が高い点を指摘したい。日常生活は現地のローカル言語が中心であるが、高等教育においては英語の比重が高く、そのために初等、中等教育においても英語教育の意欲が高い。この点は英語が公用語として日常的に使われるフィリピンでとくに顕著であったが、タイでも経済的に余力がある家庭では子供を英語教育の比重が高い私立学校やインターナショナル校に送るのが一般的であった。ローカル公立学校では教育の質が担保できないという認識が一般的であり、英語教育の充実と相まって多くの国際結婚家庭で私立学校を選択する要因になっている。

次に、タイ、フィリピンともに日本語のプレゼンスが高い点を指摘できる。とくにタイは日系企業が多く進出しており、駐在員のみならず日本人現地採用の雇用需要と、これら日本人を顧客とするサービス市場の規模も大きい。高い日本のプレゼンスは日本語の需要を高め、労働市場の中で日本語が有効な人的資源として機能する環境を作り出している。インタビューを行った国際結婚家庭は日本語教育の意欲が高く、学校選択においても私立学校と並んで日本人学校も選択肢となっていた。日本語教育については日本人親だけではなくタイ人親も日本語が将来的に有効であるはず(言い換えれば、就職に有利、高い給料をもらえるなど)だと認識しており、日本語教育に積極的な姿勢がうかがえた。ところが、こうした認識が日本語教育の実践に直結するわけではない。日本人学校に送るケースを別とすれば、日本語教育は基本的に日本人親の役割となる。日本人親が中心となって作った子育てサークルや日本人学校の土曜学級などが代案になろうが、英語とローカル言語の狭間で日本語をいかに教えるかという悩みは両国ともに共通している。

最後に、日本人の親が母語を教える動機はさまざまであるが、①親との紐帯を重視し親の母語を学んでほしいという動機、②経済的な観点から有効な外国語ととらえる人々がいる事を指摘したい。この両グループは排他的というよりどれをより意識するかといったほうが適切だろう。アイデンティティを重視する人の中には躊躇なく「私が〇〇人だから〇〇語を学ぶのは当たり前」という人もいれば、「日本語ができるタイ人」として育てるといように親の母語を明確に外国語として位置づけている者もあり、言語とアイデンティティの組み合わせのスペクトラムの幅が広く多様である。

###### アイデンティティと言語

一つ付け加えるのであれば、タイとフィリピンで英語優先の言語環境で育てられている子どもたちであるが、彼・彼女らは居住国と親の出身国両方に紐帯を感じていて、英語は脱アイデンティティ言語である点である。中には移住した親の側の言語があまりできない子どももいるが、親の出身国に対して一定の紐帯を感じている、とインタビューした親は認識していた。その一因として、親たちはタイとフィリピンともに国際結婚に対する否定的な意識は少なく、その家庭の子どもに対する偏見やいじめなどの問題も少ないと感じられているからではないか、と語っていたが、この点についてはさらなる調査と考察が必要であろう。

###### 東アジアと東南アジア

今回の調査は必ずしも東アジアと東南アジアを比較する目的があったわけではないが、調査を進めるうちに両地域の言語と教育環境の違いが現地の日本人の教育観に与える影響の大きさに気付かされた。韓国や中国では、教育の中で英語が重視されると言っても、基本的に教育は現地語で行われ、英語はあくまでも外国語教育として位置づけられるのと対象的に、今回調査を行ったタイとフィリピンでは英語が教育の中心に据えられていた。タイとフィリピンにはこのような実情を反映するように多種多様の私立学校があり、国際結婚家庭が英語重視の私立学校を選択しやすい環境が整っているとみることができよう。

## ② 親が運営する日本語サークルでのバイリンガル教育：韓国とタイの事例 親が実施する手作りのバイリンガル教育

国際結婚家族の教育戦略にあたり、韓国とタイに焦点を絞った理由は、親が自ら実施する「手作りのバイリンガル子育て」としての日本語サークルと出会ったからである。日本語サークルは、在外国際結婚家族にとっては、学校を選ぶ前の乳児期・幼児期が家庭内でできるバイリンガル教育として、日本語教育を実施できる機会である。

### 韓国における国際結婚家族のための日本語教育の状況

韓国継承日本語教育研究会によると、親による日本語教室はソウルを中心に20団体ほどが把握されている(2016年当時)。その一つが、調査協力を得た「ひまわりキッズ」である。ひまわりキッズは発足から4年が経ち、初期の頃からは、1) 当時運営の中心的役割を担っていた5人の母親たちは2018年12月に2人になり、運営や日本語教育は他の母親たちとも分担が進み、2) 2016年からは2クラス体制、2017年からは3クラス体制と子どもの成長に合わせて、組織も日本語の学習体制も整い、3) 日本語を教える担当者に、韓国の大学で日本語を教えていた元教員がボランティアとして加わり、4) 2018年12月には約22人の子どもが通う教室になっていたことなど、子どもや家族の出入りがありながらも継続し、柔軟に変化をしていることがあげられる。

### タイでの日本人父親による日本語サークル：バンコク日本語サークル

バンコク日本語サークルは一人の自営業の父親が土曜日に、自分の仕事を教室として開放し、無償で教える日本語サークルである。主宰する父親は、自分の子どもが小学生であるため、同様の立場にある国際結婚家庭の子どもで小学生の15-20人くらいを自らが教師となり教えていた。タイには日本人学校もあり、学校以外でも日本語教育をしているインターナショナルスクールの幼稚園、「タイ国日本語教育研究会」や「タイにおける母語・継承語としての日本語教育研究会」といった国際結婚家族の子どもバイリンガル教育を支えるための日本語教師たちを中心とした日本語教育研鑽の会も存在する。

### 韓国とタイでの親による日本語サークル事例から得られた示唆

結果として挙げられることは、在外国際結婚家族とはいえ、韓国とタイの社会の中での日本語に対する文脈と位置づけが異なるということが挙げられる。韓国では、進学や就職を見据えて日本語よりも英語に価値がある。タイでも英語熱は高く、社会の中では地位が高いことは確かではあるが、タイの特にバンコクでは、日本企業への就職を念頭に、英語よりも日本語の方が重要視される。在住する「社会」の中での日本語の位置づけは、在外国際結婚家族の子どもたちの日本語環境づくりに影響し、親が子どものための言語を選択するときにも影響を与える。小学校就学を機に、親が社会言語(現地の言語)、国際語、親自身の母語に優先順位をつけ、その中で家庭内の教育戦略もその影響が及ぶ。

タイのように現在日本企業が多く、就職先として好ましいと考えられている場合は日本語も国際語として考えられ、在外国際結婚家族の場合は、自分の母語と国際語が一致することにある。一方で、言語と学校を結びつけて考えるときには、すべての国際結婚家族が自由に子どもの学習言語を選べるわけではなく、親自身の経済力、親自身の学歴が子どもの教育とつながるだろう。このように、言語の地位、親の経済力と学歴は在外国際結婚家族の親の言語選択の際の要因として重要であることがわかる。

加えて、就学前の在外国際結婚家族の子どもたちのための日本語環境においては、一人ひとりの言語習得のプロセスと環境が重要であり(藤田ラウンド、2013)、その点で親による日本語教室・日本語サークルが子どもの日本語習得に果たす役割は大きい。具体的には、1) 母親、父親と性別に関わらず、親が自分の子どもと時間を一緒に過ごす、2) 親同士が日本語を話す機会にもなり、そうした親同士のチームワークのような、助け合っている模擬家族のような雰囲気の中で、子どもたちは日ごろ聞くことのない大人の会話を日本語で聴き、3) 家でもなく、保育園・幼稚園・学校(教育機関)でもない、インフォーマルな場で日本語を学ぶ、家や学校以外の自分の居場所のような「場」で「言語(ことばと文化)」を学ぶ環境が、家庭でできるバイリンガル教育として機能するのではないだろうか。

## (2) 漫画化

近年は教育や広報目的の漫画が多数作成されており、表現や情報伝達的手段として漫画は確立されてきたといえる。しかし、一方では、研究成果の公表に当たって漫画を活用する事例はさほど多くなく、参考となる情報も大変限られていた。さらに、いまだに漫画に対して否定的な見方を持つ者も少なくないため、研究成果の還元という趣旨を明示した上で、各所での情報収集、意見集約、調整を行った。

検討の結果、漫画だけでなく解説記事を入れること、漫画表現上ステレオタイプを助長することのないようにすること、分量は対象国で平等とすること、公表の形は印刷と Web との多媒体とすることなどの留意点を定め、形態としては、ストーリー（原作）となる漫画と、その漫画で取り上げられた子育て上の重要ポイントについての解説記事を入れる形とした。また、作画の作家選定にあたっては、学生団体、複数



図表 漫画の例：ソウル在住の父親

の漫画作成エージェント、プロの個人に打診し、様々な観点から検討したが、最終的には、本研究のテーマ自体にも共感を得られ、作画にあたっては繊細な表現ができることを期待して、日本フィリピンの国際結婚家庭をテーマにした作品を持つ前田ムサシ氏<sup>1</sup>に依頼した。

漫画化にあたっては、研究代表の渡辺が作成したストーリーを前田氏に送付、前田氏がネームを作成、共同研究者全員で内容を確認、必要に応じて修正を前田氏に依頼したうえで完成とした。制作した漫画の総数は、日本語版で4コマ漫画40本相当となった。また配偶者側にも広く読んでもらうために多言語展開を進め、各国それぞれの配偶者側の言語版（中国語・韓国語・タイ語・タガログ語）を作成した。

上記のような形で公開した結果、これまでインタビュー対象者や国際結婚者を中心に漫画も用いたミニセミナーを開催するなどして、還元、共有してきたが、おおむね肯定的な評価を得ることができた。漫画のストーリー作成段階で、複数の人々の話を組み合わせながらも、実際に「ありえる」話として成立させることに腐心したが、「自分のことのように」、「『あるある』話だ」、「みんな結構こんな感じなんだね」といった感想を頂いた。このような感想はまさに本研究の意図するところであり、この点は評価してよいと考える。今後もこれらの作品を、印刷物、Web など多媒体を利用して、広く国内外に発信し、現実に海外で子育てしている父親やその配偶者たちに「役立つ」ように還元する予定である。これらの手段を通して、インタビューに協力いただいた人たちだけでなく、様々な方々にも国際結婚した在外日本人父親について、読み、知って、考えて頂くことで、実態に即した越境する日本人結婚移住者の教育についての言説を構築していくことに貢献したい。

## (3) まとめ

今後、助成期間中に得られた情報をさらに精査して、論文等の形で発表するだけでなく、研究成果を反映させた漫画及び解説の頒布を通して在外の国際結婚子育て家庭に還元し、国際結婚家族を取り巻く環境についての社会における理解を深めるためのきっかけ作りとなるよう努めたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

- ① 渡辺幸倫、宣元錫、藤田ラウンド幸世 (2019) 「越境する結婚移住者の教育観に関する基礎調査 国際結婚した在外日本人父親の言説分析」『相模女子大学文化研究』Vol. 37、57-77。(査読無)
- ② 宣元錫 (2019) 「なぜ韓国は重国籍容認に舵をきったのか」『移民政策研究』Vol. 11、19-30。(査読無)
- ③ 渡辺幸倫、久保康彦 (2018) 「タイ王国における日タイ国際結婚家庭の教育観：教育商品調達についての語りから」『相模女子大学紀要』Vol.81、1-18。(査読無)

〔学会発表〕(計 6 件)

- ① 渡辺幸倫 「国際結婚した在外日本人父親の言説分析 研究成果還元のための漫画化プロジェクト」国際理解教育学会 29 回研究大会 (相山女学園大学) 2019 年 6 月 15 日

<sup>1</sup> 国際結婚コミックエッセイ作家。代表作は『フィリピンかあちゃん奮闘記 in ジャパン』ぶんか社 2013 年など。同氏のブログはこちら <http://maedamusashi.com/>

- ② 渡辺幸倫「フィリピンで子育てする日本人親の教育観」越境する結婚移住者の教育観に関する基礎調査報告会（北海道大学旭川校）2018年7月31日
- ③ 宣元錫「フィリピン居住国際結婚家庭の教育戦略」越境する結婚移住者の教育観に関する基礎調査報告会（北海道大学旭川校）2018年7月31日
- ④ 藤田ラウンド幸世「国際結婚家族のバイリンガル子育てとしての在外日本語教室—韓国とタイでの事例報告—」越境する結婚移住者の教育観に関する基礎調査報告会（北海道大学旭川校）2018年7月31日
- ⑤ 渡辺幸倫「バンコクで子育てする日本人父親の教育観 —海を渡った父親たち—」国際理解教育学会 28回研究大会（宮城教育大学）2018年6月16日
- ⑥ 渡辺幸倫「国際結婚した日本人父親の子育て言説の考察 —海を渡った父親たち—」国際理解教育学会 26回研究大会（上越教育大学）2016年6月18日

〔図書〕（計 3 件）

- ① 渡辺幸倫（2019）「バンコクにおける日タイ国際結婚家庭の教育商品調達について」久保康彦、渡辺幸倫、鈴木涼太郎編著『ネット通販と買い物弱者 在外子育て家庭からの示唆』くんぷる
- ② Sachiyo Fujita-Round（2019）'Bilingualism and bilingual education in Japan' in P. Heinrich & Y. Ohara "Routledge Handbook of Japanese Sociolinguistics" Routledge.
- ③ 渡辺幸倫（2016）「家族の変化を知る —— 多文化な家族と地域社会」小泉康一・川村千鶴子編著『多文化「共創」社会入門』慶應義塾大学出版会

〔その他〕

研究資料・成果掲載ページ：

<https://tabunkakosodate.wordpress.com/>

成果還元のためのマンガ掲載ページ：

[http://www.sagami-wu.ac.jp/faculty/arts\\_sciences/english/teacher/details/watanabe\\_yukinori.html#scientific](http://www.sagami-wu.ac.jp/faculty/arts_sciences/english/teacher/details/watanabe_yukinori.html#scientific)

## 6. 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：宣 元錫

ローマ字氏名：(SUN Wonsuk)

所属研究機関名：大阪経済法科大学

部局名：公私立大学の部局等

職名：研究員

研究者番号（8桁）：10466906

研究分担者氏名：藤田ラウンド 幸世

ローマ字氏名：(FUJITA-ROUND Sachiyo)

所属研究機関名：国際基督教大学

部局名：教養学部

職名：客員准教授

研究者番号（8桁）：60383535

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：裘 曉 蘭

ローマ字氏名：(QIU Xiaolan)

研究協力者氏名：李 埤 鉉

ローマ字氏名：(LEE Hohyun)

研究協力者氏名：高橋均

ローマ字氏名：(TAKAHASHI Hitoshi)

研究協力者氏名：増古剛久

ローマ字氏名：(MASUKO Takehisa)

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。